

1 神の命令としての帰郷

二〇年ぶりの帰郷。三〇章、三一章を飛ばして、今日は、三二章から、改めてヤコブの人生を辿ります。

伯父ラバンと別れ、メソポタミアを出て、すでに何日もたちます。旅も終わりに近づいています。カナンは目前です。明日いよいよ故郷に入ります。その最後の一日、そしてその夜起こったことを、三二章は伝えています。

聖書の見出しの通り、ここはエサウとの再会の準備です。三二章を二回に分けて取り上げます。今日は、かつて渡った「ヨルダン川」まで来て、川の手前、そこに野営したところまで。来週は、そのヨルダンの渡し場、「ヤボクの渡し」での特異な出来事を取り上げます。

いま帰郷するヤコブ、ヤコブの年齢は、どのくらいだったのでしょうか。彼の生涯は一四七年だったと他のところであり(四七・二八)、簡単に言うことは難しいのですが、ラバンのもとで二〇年働いて、その間結婚し、相当の富を築いた、ということを考え、私どもに置き換えれば、四〇代後半。三〇歳から二〇年と数えるなら五〇歳ぐらいでしょうか。

前に、母リベカがヤコブを逃がすとき、彼女が、「しばらく」(二七・四四)伯父さんのところに置いてもらいなさいという言葉があったことを、おぼえておられるでしょうか。「しばらく」とは、もとの言葉で、数日の意味だということも、そのとき言い添えた記憶があります。数日は短すぎるとしても、これほど長くなるとは、ヤコブは考えていなかったと思います。

私どもにおいても、「しばらく」のつもりが、何年、何十年となる、いや一生のことになることは、ないことはありません。ヤコブにとってもこの二〇年、青年から壮年にかけての二〇年は結局彼の人生そのものでした。逃亡生活は、むろん自ら望んだものではありません。しかし人間ヤコブ、信仰者ヤコブは、その二〇年をへてつくられたのです。

とはいえ、ヤコブ自身から見れば、私どもが素通りしてしまった三〇、三一章、エピソード満載の箇所ですが、あまり触れてもらわなくていい時代の自分であったかも知れません。

ヤコブは、いま、前を向いています。ラバンのところでは、つまり過去には、色々なことがありました。欺かれてレアと結婚したこと。何年も働いて得た妻ラケル。嫌っていたレアには六人の息子、一人の娘が生まれます。ラケルには何年も子供が生まれず、ようやくヨセフが生まれます(三〇・二三。三五・一六も参照)。ヤコブは人間として、人並み以上の労苦を重ねてきたといっているでしょう。それらをみな背負って、いまカナンに帰ろうとしています。帰郷しようとしています。

この帰郷の思いがはじめて芽生えたのはいつか、聖書で確認すると、三〇章に、次のような言葉があります。ラケルがヨセフを産んだころです。ヤコブはラバンにこう

言っています。

わたしを独り立ちさせて、生まれ故郷へ帰らせてください・・・(三〇・二五)。

これに対してラバンは、口先では、それを認めることを言いながら、ヤコブを帰らせようとはしませんでした。そうした中、主なる神が、こう言うのです。

あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる(三一・三、一三)。

ヤコブをして、いま前を向かせ、故郷へと帰らせようとしているのは、この主なる神の言葉、命令なのです。

2 なだめるために

主なる神ご自身が、もう一度自分をカナンへ、父祖の地へ導いておられる、このことを確信させる出来事が、帰郷の前に起こります。

ヤコブが旅を続けていると、突然、神の御使いたちが現れた。ヤコブは彼らを見たとき、「ここは神の陣営だ」と言い、その場所をマハナイン(二組の陣営)と名付けた(二〜三節)。

この場面は、私どもに、あの、天と地を結ぶ階段を神の御使いが上り下りしていたという、ヤコブの夢を思い起こさせます(二八・一〇)。ベエル・シェバを立ち、逃れの旅に出ですぐのことでした。

あの二〇年前の夢のことを、ヤコブもすぐ思い起こしたに違いありません。これは夢ではありません。幻です。あの時のような、主が現れ、語りかけるといふようなこともありません。しかし、この幻だけで、彼には十分だったのではないのでしょうか。いま帰郷しようとするヤコブ、この時も、主は共にいてくださる、導いていてくださることを確信するには十分だったのです。

ヤコブにとっては〈帰心矢の如し〉だったでしょう。父イサクは生きています(三五・二七)。しかし母リベカの消息は、ヤコブも知らなかったと思います。私どもにも分かりません。聖書を見るかぎり、ヤコブを送り出してから、ここまで、リベカの名前は出て来ません。

問題は、皆様もお分かりのように、兄エサウのことです。兄は、二〇年前、自分が兄にしたことを赦してくれるのでしょうか。エサウを欺して長子権を奪い取り、イサクの祝福を自分のものにした自分を赦してくれるのでしょうか。二〇年なんて、つい昨日のこと、私どもがそう思うように、ヤコブも、きっとそう思っています。怒りは収まっていな思っているのです。

その恐れが、その不安が、故郷に近づくにつれ、むしろ増すばかりです。一方で神

は帰れとおっしゃっているし、自分も帰りたいたい。帰るしかない。しかし帰れば、襲われ、殺されるかも知れないのです。

それなら、どうすればいいのでしょうか。襲われる前に襲うという選択をしないのなら、こちらから赦しを乞う以外にはないのではないのでしょうか。そうかも知れませんが、しかしヤコブは、いわゆる赦しを乞うということをしませんでした。そうすることは長子権を返し、祝福を返すことになりません。それはありえない。ヤコブは「なだめよう」（二一節）とします。怒りをしずめようとします。その準備、それが今日の箇所、帰郷を前に最後にヤコブがしたことでした。ヤコブは、何より、エサウの様子を知ろうとして「使いの者」を遣わします。

ヤコブは、あらかじめ、セイル地方、すなわちエドムの野にいる兄エサウのもとに使いの者を遣わすことにし、お前たちはわたしの主人エサウにこう言いなさいと命じた。「あなたの僕ヤコブはこう申しております。わたしはラバンのもとに滞在し今日に至りましたが、牛、ろば、羊、男女の奴隷を所有するようになりました。そこで、使いの者を御主人様のもとに送ってご報告し、ご機嫌をお伺いします」（四く六節）。

お気づきのように、なだめるために、ヤコブは、兄エサウを「わたしの主人」と呼び、自らを「僕」と称します。兄と弟ではなく、主人と奴隷の関係とし、徹底して恭順の意を示します。

自分の多くの富に言及しているのも、場合によつたら、すべて贈り物として差し上げてよいと、ほのめかしているということでしょうか。

ところで、このところから、私ども、神の一つの計らいを知ることができます。エサウは、いま父イサクと一緒にいない、父祖の地にはいないということです。すでにセイル地方、エドムの野（死海の南東）にいるということです。つまり、ヤコブが、カナン約束の地に戻る可能性があるということなのです。

3 ヤコブの祈り

エサウがいまカナンの地にはいないことは、希望につながる一つの材料ですが、使いの者がもたらした報告は、ヤコブをひどく不安にさせるものでした。エサウも、ヤコブを迎えるため、四〇〇人の供の者らを連れて、こちらに向かってくる途中だということです。ヤコブは「非常に恐れ」（八節）ます。四〇〇人という数は、かつてアブラハムが甥のロトを救出するために集めた手勢が三一八人（一四・一四）でしたので、その多さが分かります。

兄エサウへの「ご機嫌伺い」が不調に終わり、ヤコブがとった更なる対策は、今日の箇所が伝えているかぎり、二つでした。

一つは、連れている奴隷、家畜などの財産を二組に分けて、たとえ襲われても、半分は残るようにしたことです（八く九節）。

もう一つは、後半の一四節以下に書いてあることです。ヤコブ自身が兄への贈り物

を選びます。エサウが好むものを知っているのはヤコブだけです。そしてそれらはいくつかに分け、大行列（キヤラバン）に仕立てて、エサウの思いを「なだめ」（二一節）ようというのです。

確かに、家畜の数が同じでも、次々に、行列をつくって、これはあなた様への贈り物だと言えば、エサウの心も和らぐかも知れない。冷徹で、機転と知略に長けたヤコブは、ここでも健在です。

ところで、こうしたヤコブの必死な準備とともに、今日の箇所に入挿されているヤコブの祈りも、私ども、見逃すことができません。最後に、この祈りを、取り上げたいと思います。

わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ、あなたはわたしにこう言われました。「あなたは生まれ故郷に帰りなさい。わたしはあなたに幸いを与える」と。わたしは、あなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けるに足りない者です。かつてわたしは一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めてきて、わたしをはじめ母も子供も殺すかも知れません。あなたは、かつてこう言われました。「わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数え切れないほど多くする」（一〇〜一三節）。

まことに素直な祈りです。だれに祈っているか、ヤコブは主なる神をはつきり見据えて、心を注ぎ出して祈ります。「祈りの模範」（グンケル）と言う人もいます。私は詩編の祈りを思い起こします。感謝があります。罪深い者であることの自覚と悔い改めがあります。助けてください、救ってくださいという願いがあります。そして神の約束の言葉への信頼があります。

感謝、悔い改め、願い、信頼、こうしたものが、実際、信仰という言葉の中に含まれているのです。それらが、いま、神の前で、祈りの中で、ヤコブの心に開かれています。聖書を読む会で、私どもも、毎週詩編を数編読む中で、同じような経験を重ねています。

この中で「わたしは、あなたが僕に示してくださいましたすべての慈しみとまことを受けるに足りない者です」という自覚、神の前での自らの小ささを思い、悔い改めの姿勢を主に對してとる、これは、私ども、その都度見てきたヤコブの信仰に、いままで見られなかったものです。

ヤコブも成長しています。信仰において成長しています。二〇年間は決して無駄ではなかったのです。ヤコブの生活の表面から神がいなくなったように見えた時もありました。しかし神はヤコブを離れたものでは決してなかった。主なる神は、いつもヤコブと共にいて、彼を受け入れ、彼に伴い、その信仰と生活を導いてくださっていたのです。そのことを私どもも信じ、喜び、ヤコブの神、主を誉め称えるものでありたいと思うのです。